



三島田紀夫短篇全集 3

遠乗会



三島由紀夫短篇全集 3

遠乗会

昭和46年 3 月20日 第1刷発行

著 者 三島由紀夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 / 郵便番号112

電話東京 (945) 1111 (大代表)

振替東京3930

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定 価 650円

© Yōko Hiraoka 1971, Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-135339-2253 (0) (文1)

目次

魔群の通過	訃音	親切な機械	孝経	火山の休暇	怪物	花山院
7	36	58	86	108	122	139

果実

鴛鴦

日曜日

遠乗会

牝犬

偉大な姉妹

あとがき

256

217

192

178

164

155

147

装幀

横山
依岡
昭三

明

遠乗会

三島由紀夫短篇全集 3

魔群の通過

一

玄關に燈りがついた。つづいて三和土に下りる冷え冷えとした下駄の足音の静けさにそれが女だとわかる。紫いろの袂が格子戸の磨硝子におしつけられ、うつむいた横顔の影が差込錠をあけにかかった。

この格子戸のむこうにあるものが見ないうちから伊原にはわかっていた。そのむこうには、五年前に彼を拒んだ、まだ独り身の恒子が、それ以来訪れなかった路屋家の内部が、この間ふと出会って今夜の会合に彼を誘った路屋護——恒子の父——が、それから退屈な中年男たちの莫迦らしい会合が、彼を待っているのは

知れきったことである。それにしても、わかりきったことだけを愛するような年齢に伊原はなっているのだ。彼が登山家を以て自ら任じた昔にしても、今の彼と別な男ではない筈だった。登山家に特有な、征服の巧緻な計量に裏づけられた・いわば美しい悪だくみ、——地図の縮尺を現実へ移し植え、未知のものを決りきった既知の掌へ収獲くわくれるための、明るい・人目恥じぬ悪だくみ——、を物語り顔の彼の目には、いつも遠い山脈をながめやっているようなかがやきが四十の今も失われずにいるものの、それは決して夢想家の目ではなかったからだ。

その目を、ひらかれた格子戸のかげから暗い美しい目が見上げた。それから恒子は戸のかげへ心もち身を退くようにした。

快い無感動が伊原を喜ばせた。五年まえの愉しからぬ記憶に拘泥しない中年男らしい自分の身勝手な寛容を、瞬間、彼はおもうさま享樂した。

この家ではもう女中を使っせず、馴れない労働がいわば彼女の不手際に仕返しをしたかのように、恒子は廿五歳の筈にしては老けすぎていた。秀でた鼻がわ

ざとらしく見えるのもその一つの兆候だ。しかしこの老け方には何かしら未知で新鮮なものがある。このあわただしい凋落のなかには、枯れぎわの薔薇のような暗い強烈な匂いがある。こもつていそうだ。

彼女は二度と伊原慶雄の顔を見上げず、ふとして襲いかかる沈黙が彼女に強いる。いわば精神的な綱渡りに熱中しているようにみえた。玄関の薄闇のなかから伊原を招き入れる恒子の白い足袋のうごきは、足に限りて年よりもはるかに稚ない小ささだけに、まるで綱渡りをしているように軽躁で賑々しかった。

「ちょっとお待ちあそばせ」——奥の父へ告げに行こうとして彼女が言った。

「ピンが落ちそうになっています」

「あら……」

ピンは耳のところで、この軽躁な動きに危なっかく揺れていた。しかし本当のところ伊原はそれを見のがすつもりでいたのだ。それというのに、彼女が立去ろうとした時、この微妙な注意がおのずと彼の口から洩れた。一見親身なこの注意の言葉のおかげで、却って彼は依然として彼女のこちらの岸にいる自分を

見出した。

——恒子が去った廊下を、紬の着流しの落屋護が小走りに来るのだった。決して走らなかつた男が、待たせてある客に対して決して走る義務を感じることもなかつた男が、事もあろうに家の中を女中のように駆けて歩いているのである。あらゆる点で落屋護はそのかみの彼自身の下手糞な模写を思わせた。端麗に禿げ上つた額までが、今では何かしら贗物めいて見えた。彼自身がもはや今の彼に似合っていないかつた。

「やあ、ようこそ」彼はまず無代のお辞儀をした。むかしこのお辞儀はひどく高価くついたものだった。

伊原のこの年長の友は、青年時代、伊原のお手本を以て自ら任じた人だった。京都大学当時の遊樂からはじまって、パイプのよしあし、仕立屋のよしあしにいたるまで、伊原が彼に倣わぬ例しとはなかつた。この間省線電車のなかでくたびれた背広を着た落屋に出会つたとき、伊原が咄嗟に感じたものは、落屋のいたましきよりも、こうした落屋を見せられていることの伊原自身のいたましきの方なのだった。唯一つ変らぬものはといえば、優雅なお辞儀の巧さがそれだ。

「う・な・年・に・似・合・わ・ぬ・鼻・声・で・」莫・逆・な・冗・談・を・仰・言・る・
 その・く・し・よ・っ・し・や・私・に・面・白・が・つ・て・い・な・
 「・攪・り・な・ん・か・に・」――辻・は・持・ち・前・の・癡・賣・
 の・好・色・類・が・死・ね・て・こ・ろ・に・た・つ・た・の・よ・
 「・お・久・し・振・り・。あ・な・た・来・て・下・つ・た・わ・。今・こ・
 三・人・と・も・伊・原・は・旧・知・の・仲・だ・つ・た・。

我・た・つ・た・。

「わ・か・し・小・説・家・志・望・で・あ・つ・た・無・為・徒・食・の・會・
 辻・と・垣・夫・を・こ・伊・原・が・さ・て・、背・が・動・い・て・、ま・だ・ま・だ・う・か・な・人・
 背・が・あ・つ・た・。な・れ・か・い・な・庭・の・後・の・暗・い・縁・先・に・は・も・う・の・声・も・殆・
 ん・ど・き・か・し・長・椅・子・の・背・の・後・の・暗・い・縁・先・に・は・も・う・の・声・も・殆・
 し・か・し・は・な・か・つ・た・。

「だ・つ・た・。肥・老・の・社・長・が・さ・す・と・い・い・と・き・く・ら・い・彼・が・謹・厳・な・人・に・み・
 肥・り・た・初・め・を・つ・て・口・を・ひ・き・つ・て・何・か・の・業・家・に・
 う・辻・が・、大・垣・夫・の・人・を・追・放・し・な・さ・せ・た・ぞ・う・
 叫・ん・で・い・る・垣・夫・の・人・を・追・放・し・な・さ・せ・た・ぞ・う・
 お・お・し・な・さ・い・。腹・を・お・腹・に・こ・え・こ・う・て・う・こ・い・き・り・も・」

ものではありません」

十年ちかく中風で寝たきりの良人をほったらかして遊びまわっている垣見夫人は、それでも良人にもう八十何種類かの中風の薬を飲ませたのだった。また彼女はあやしげな指先療法を信じていた。

「こんなお爺さん早く中風におなりになるといいのだわ」

「中風になって、あなたに毎朝少しずつ毒を盛られて、十年も生きていたらさぞ愉しいことだろうよ」

「ごきげんよう」——曾我が貧血の目立つ・皺くちやの手巾のような手をさし出した。抵抗も重みも体温も感じられないふしぎな手だった。耳もとで怒鳴り立てている下手な漫才が全然きこえないふりを曾我はしていた。田舎娘の貞操のように頑なに小さな己れを守る昔ながらの彼の性癖で、別段辻や垣見夫人への軽蔑のあらわれではそれはなかった。自分の興味の無いものはきこえぬふりをするのが、彼の彼自身へのエチケツトであるらしかった。だから彼はまた気に入った相手には、不必要に低い蒼ざめた声で親密げに喋った。「お目にかかりたかったですよ」——彼は妙にしよ

んぼりした目つきで伊原の握手を軽く揺った。「あなたみたいな成功者に会ったら、何か精神的な御利益があるような気がしていたんです」

——伊原は気を悪くした。からかわれているように思っ。この人たちはその昔、人をからかうためになら驚くべき情熱と奇略を賭けたものなのである。しかし今の彼らの軽口や悪ふざけは、逆に自分たちがからかわれたくないばかりに、お先廻りにやっていることだと気づくには、——それ自身かれらの情熱の衰えのしるしであると気づくには、——伊原はなお手間取った。

この仲間で、唯一人戦後の落伍をまぬかれた立場から、この人たちを前にしては謙虚であろうと努めることで、伊原は嘆かわしい軽さわぎに耐えることができた。尤もその謙遜自体におびただしい軽蔑の甘味を盛り込みながら。

卓上のブランディは、罍の肩をわずかに透かしているだけだった。碌に飲みもしないうちに猥談におちこむ辻の習癖が、今では食事前の僧侶の勤行めいて眺められた。彼は追放このかた、エロティックな著作に

専念しているともいわれていた。かと思うと仏頂面をしたまま長椅子から立上り、股に黒天驚絨と金糸の王冠をはさんで歩くフォオリイ・ベルジュールの裸女をまねて、絨毯の上をそろりそろりと異様な腰つきで歩いてみせた。垣見夫人は膝の上へのせたクッションを指環だらけの手でだるそうに叩きながら、「およしなさいったら。いやなお爺さんね。もうおよしなさい」をくりかえしていた。そのついでに伊原のほうへも先天的な例の色目を投げてよこすことを忘れなかった。

「莫迦な女ですね」——伊原を殊更薄暗い壁際の椅子へ導きながら曾我が言った。彼の煙草を持つ指は脂のためにほとんど瑤瑤いろになって、しじゅう繊細に慄えていた。

「自分を莫迦だと知っているだけになお始末がわるい。女というものは、自分を莫迦だと知る瞬間に、それがわかるくらい自分は利巧な女だという循環論法に陥るのですね」

こういう小説風な物言いに伊原は苛々した。下手な絵描きに限って絵描きらしく見えることを好むものである。

「莫迦だけれど、僕は好きだよ」——その実伊原にとって垣見夫人くらい不愉快な女はないのだった。曾我はこんな見え透いた逆手にも、坊っちゃん育ちらしく簡単に引っかけた、

「あなたがあの女をお好き？　そう、何かわかるような気がしますね。戦後の息のつまりそうな空気のなかで、ともかくあの女は自分が呼吸するだけの空気には困らない人ですものね。第一あの女の脳髄も心臓も風通しがよすぎるくらいなんですから」

「冬になったら困るだろうね」

「ところがあの女は石炭にも不自由しないんです。毎週辻さんと寝る明る日には、Kという男と寝る予定が決っているのです。Kって何者だと思えます。あの家へ出入りしている薄汚れた担ぎ屋の青年ですよ」

——嘆かわしい人たちだった！　あらゆる滋養分をうけつけない瀕死の病人の胃のように、彼らの魂は何かの有効なもの・有意義なもの・高いもの・美しいものをうけつけれない状態にあり、強いての摂取は死をもたらしのだった。しょうことなしに彼らはビタミンを軽蔑していた。事実それらは彼らに毒なので

あつたから。今では彼らを衰亡にみちびく類いの元素だけが、辛うじて彼らの胃に受け入れられた。モルヒネ中毒者がモルヒネ以外の何ものをもねがわないように。

——さりとて自分たちに媚びる観念だけを喰べて生きている彼らにしても、馴れ合いや是認でやっていることではなかった。それはいわばいたましい共喰いの一種なのだった。魂の不健康と、感情の不健康と、心にかぶあらずの思い付き、思想らしきもの・人からうける印象、またこれら凡てが促す行動の不健康と、不健康同志の共喰いであつた。果ては自分自身の肉に舌鼓を打つこともしかなかつた。

後藤伊久子がこの人たちに加わつて今夜の客が揃つたのは、八時に近かつた。伊久子は伊原がはじめて会う・恒子の友達のソプラノ歌手で、胸を病んでいた。というのも自己宣伝で、どこまで本当やらわからなかつた。彼女はときどき思い出したように、とつてつけたような咳をしていた。

美しさからいうと、まちがいなく恒子より美しい上に、伊久子には何ら精神の残滓を感じさせない無機質

の透明な色気があつた。精神などという重荷に耐えたことのない狐のようにしなやかな肩や、やや固めな・やや薄い唇や、硬い簡素な線を持った胸の円みや脚の曲線や、笑つたあとで必ず大袈裟に髪をゆるする癖までが伊原を魅した。二人同志だけが初対面であつたので、名刺が交換された。伊久子のは男と同じ大きな名刺に無細工に明朝で刷られた粹いなものだった。

「お気をつけなさい」——伊久子が恒子に用があると言つて出てゆくと、曾我が卓に落ちたブランディの一滴を、指さきに巻きつけた手巾で偏執的に丹念に拭き取りながら、「彼女はね、もう胸で先が永くないと信じているんです。それで死ぬ前に百人斬の悲願を立てたということですからね」

「それは本當のことよ」——辻はまた感興なげな・そのくせ本心は面白がついていそうな例の調子でつべくわえた。「落屋君は九番目だそうだが、十番目は誰かな。しかしこのスピードののろさで行ったら彼女はよっぽど長生きしなければならぬ計算だな」

垣見夫人は同性の噂話には口を挟まぬ主義を実行して、仄かな毒を湛えた目で、男たちの額ひたいを見比べてい

た。傲慢な子供の表情がその顔に泛んでいた。いかさま彼女にとって、男たちがほめそやす美人よりも、男たちが競って欠点探しをする美人のほうが、心に痛い嫉妬の原因になるのだった。

しかし人々は主人役の甲高い神経質な呼び声にふりむいた。

「用意ができました。むこうの座敷へお移りください」

緞子の帷を卷いた戸口の迫持の下で落屋が室内の人たちに呼びかけたこの言葉で、みんなは解き放たれた活人画のように、急に体をうごかし忙しそうな身振をして立上った。

十畳の座敷には座蒲団が敷き並べられ、床の間の前に十六ミリ用の映写幕が立てられていた。フィルムはむかし落屋が巴里で買い蒐めて持ちかえったものだった。五人のうち三人までが巴里を過去に持っている今夜の客は、それらのフィルムがエロティックだからというだけの興味で来るためには臺の立った人たちばかりだったが、彼らのぞみはむしろすぎし日の遊樂の

いちばん露わな偽りのない映像に、追憶のなかにあるいわば「酔わせない酒」ともいうべきもの、非常な情緒・明晰な陶酔ともいふべきものを見出すところにあるのだった。それはおそらく今日の時代が至るところで彼らに思い起させる過去へのいたましい憧憬を、苦しみのない方法で癒やしてくれ、その憧憬をいつも一そいういたましいものとする回想の甘味を処理して、生の炭酸水のような味わいのものに造りかえてくれる筈であった。

そういう人たちの心に、この座敷へ入りあぐねて伊久子と恒子が立てたきらびやかな若々しい笑い声が、漠とした非難や蔑みの調子を帯びてひびいたとしても不思議はない。

「いやだわ。あたくし、すむまではかのお部屋にいるわ」とメゾ・ソプラノが言っていた。彼女の腕環が、押されるはずみに、柱にふれて鳴りひびく音がした。

二人は見る見ないの議論をして押し合ったすえ、頬のあたりを荒々しく染めて、勢いよく部屋へ入って来た。女の匂いが暴風のように夜の部屋にひろがった。伊原のとなりに伊久子が坐った。暗くなって映写幕が

照らし出されると、その反射光が彼女の眼の白いところを宝石のような紫にした。

一巻物や二巻物がおよそ十幾通りもそろえてあったが、言うも当然のことながら、内容は大同小異であった。映写技師の落屋護が、洒脱な活弁をきかせるのだった。

税関の目をくらすために、フィルムはアメリカ出来の活劇の字幕と冒頭の部分とをはじめの方に継ぎ足してあった。荒野を悪漢の一隊が騎馬で疾駆してゆく。カウボーイが追撃する。むかし伊原は葵館でも一寸まじな無声映画を見たものであった。「伊太利アンプロジオ会社」が莫大なる費用と数ヶ月の日子を要して撮影せる全五巻三百十五場七千二百尺の大作品『オセロ』や、「米国ヴァイタグラフ会社」作全二巻千八百六拾五尺『天罰』などの活動大写真を。

しかしカウボーイの大写しが忽ち卵いろのフィルムの生地に移って、ややあって、わざとらしく薔薇の花模様を散らした沈鬱な字幕が、映写機のけだるい廻転音に伴われて泛び上った。

Leçon d' Amour

人々は見るとのだった。落葉の散り敷くリュクサンブール公園のベンチで二人の貴婦人が一人の男と待ち合わせるのを。彼女たちが怪しげなホテルへこのジゴロを伴ってからの画面の顛末はともかくのこと、人々は女たちが眼深に冠った帽子の流行や、ジゴロが生やしている・今は区役所の小使などに辛うじて見ることでできる形の髻や、そしてこれらの流行の模倣が濶歩した銀座通りや、その赤煉瓦や、……彼らに共通の黄金時代であった前大戦後の一時期の幻影をありありと見た。彼らの目は裸かになった二人の貴婦人のたぐい稀な肉の盈溢を、フィルムの悲劇的なスピードが彼女たちに強いるほとんど莊嚴な情熱を、身を任した男の獵犬のようなすばしい従順さを見る代りに、たった一つのもの、彼らの「大正時代」を見るのであった。それほど彼らにとって、肉の交わりを見ることの甘さは、過去に浸ることの甘さと同質同類のものなのであった。

ところがこうした想像力の詩にはあやまちがあった。けだるい映写機械の響きにつれて、画面の中をころがりまわる男女のモデルのように、この人たちがた